



十二句貼交屏風 千代尼

■ 書院を飾る I ー絵画と調度ー 前田育徳会尊經閣文庫分館

■ 特集展示 加賀の俳人たち ー軽妙な俳画の世界ー 第2展示室

■ 特集展示 三浦 泉 展 ーその軌跡ー 第3展示室

■ 石川県の工芸 第5展示室

- 3月の企画展示室
- 平成21年度開催の展覧会を振り返って
- 加賀百万石の文化講座
- ミュージアムレポート
- 3月の行事
- 所蔵品紹介



ふゆ 三浦 泉

特集 加賀の俳人たち

— 軽妙な俳画の世界 —

3月10日(水)～3月27日(土)

会期中無休

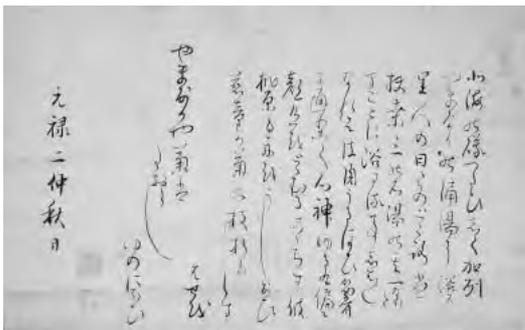
有名な「奥の細道」行脚(一六八九)の帰路、芭蕉は加賀へ立ち寄り、この地の俳人たちと交流したことから、加賀では蕉風(芭蕉を祖とする俳諧の流派)が興り、その没後も芭蕉を慕う俳人が続きました。本特集では、こうした加賀の俳人たちが記し、描いた「俳画」を紹介します。

「俳画」とは、俳句に添えて描かれた絵画のことですが、即興ながらも機知に富み、滑稽味に溢れていることが特徴です。それは単に、俳句を絵画化したものではなく、ユーモアに満ちた俳諧の熟成とともに発展しました。優雅に洗練され、神前に奉納された連歌に対し、日常に即した道化の文芸である俳諧は、室町末期以降栄え、江戸時代に入ると「画」と「俳」の双方に秀でた人物が登

場しました。

例えば、俳人たちが慕った芭蕉の姿は、俳人たちによって歌とともに描かれました。その中のひとつ、芭蕉が詠んだ五句を千代尼が記し、その姿を甫尺が描いた一幅には、笠に杖を持って座す芭蕉のうしろ姿が描かれています。芭蕉は墨のみ、線のみで描かれており、その簡素な筆致から、蕉風の理念でもある「詫び」「寂び」をうかがうことができます。

四季を詠んだ千代尼の句に、絵が添えられた『十二句貼交屏風』(表紙写真)も見事です。本特集では、こうした「俳画」を中心に、芭蕉の木像や所持した頭陀袋もあわせて紹介します。



景文 温泉嶺山中の句 松尾芭蕉

書院を飾る I

— 絵画と調度 —

3月10日(水)～3月27日(土)

会期中無休

加賀藩前田家に伝わった文化財を公開展示する、前田育徳会尊經閣文庫分館の春の特集展示として「書院を飾る」を開催します。加賀百万石という大藩の藩主としての格式とも言える「文武両道」の精神を、今回展示する絵画や工芸から感じ取っていただきたい企画です。

大名の公式行事に用いられた広間には、床の間・違い棚・付書院といった、さまざまな道具が飾られる専用の空間が備えられていました。これらの飾り付けに用いられた花生・香炉・文房具などの品々は、いずれも貴重な品ばかりでした。また床の間には大幅の絵画が飾られ、いかにも大藩の藩主の持ち物にふさわしい今回の展示をご堪能いただければ幸いです。

蒔絵三十六歌仙花卉文提重

提重とは、手に持って携行するために作られた組重箱のことを言います。屋外の宴に気軽に持ち運べる弁当箱の一つの形態として、桃山時代あたりから使われ始め、江戸時代に大いに流行したもので、豊臣秀吉の「吉野の花見」や「醍醐の花見」あたりから盛んになったと考えられます。

この提重では、外枠の両側面を透彫としており、それぞれに十八名ずつあわせて三十六歌仙を配しています。また天板には重ね色紙に源氏絵と柴垣に桜がそれぞれ蒔絵されており、内部には四段重箱や銀製の徳利、取り皿、引出などが納められ、それぞれに源氏絵や桜楓が表現されています。

蒔絵三十六歌仙花卉文提重

第5展示室

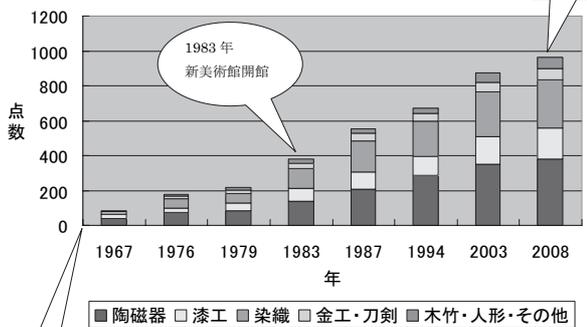
石川県の工芸

3月10日(水)～3月27日(土)
会期中無休

当館の近現代の工芸コレクションは、現在約一〇〇〇点を数えるにいたっており、全所蔵品の約三分の一を占めています。昭和三十四年の旧館開館以来、半世紀の美術館活動の中でコレクションを充実させてきたわけですが、下記のグラフでわかるとおり、所蔵品は昭和五十八年の新美術館開館にあたりその五年前の約二倍の増加を示し、さらにリニューアルを迎える時期にはその二倍以上の伸びを見せています。そうしたコレクションの集積は、藩政時代から培われてきた当県の豊かな工芸の美と技の結晶であり、その歴史を語る上で欠かすことのできないものとなっています。

本展では、明治から現代にかけて制作され、それぞれの時代の特徴が反映された優品約五十点を一堂に展示し、多彩な工芸表現の美をご鑑賞いただきたいと思います。

石川県立美術館 近現代工芸コレクションの推移



2008年
リニューアル
オープン!



迦陵頻伽宝相華文時絵経箱 松田 権六

第3展示室

特集 三浦 泉 展

—その軌跡—

3月10日(水)～3月27日(土)
会期中無休

本展は風景画を中心に制作を続ける洋画家・三浦泉氏の創作の歩みを、二十点の作品によりご覧いただくものです。

三浦氏は金沢美術工芸大学大学院の頃から十年近く、工場や巨大な起重機など、人の手による構築物を垂直線を強調して描き続けました。いずれも文明の象徴ではあるのですが、画面は哀感を漂わせています。

次に、廃屋、廃校に想を求め、生きた人々の痕跡を、たおやかなノスタルジーの中に描き、風景と心象との融合ともいえるべき世界を展開しました。この時期の代表作は一九九五年に第三十八回安井賞展で佳作賞を得た「遠い日」でしょう。実際は廃校の小さなプールなのですが、画面一杯に描かれ、歓声が渦巻く巨大なスタジアムとも思えます。往事の賑わいざわめきは沈黙へと変わり、時の移ろう哀しさが乾いた表現にマッチしています。

その後テーマは『自然』へと向かい、画面は透明な絵具層を何度も施し色彩の艶と深みを加えました。近作の「ふゆ」に見られる、重く垂れ込める雪雲、ちらつく雪と木々繁る山間は、雪深い地に育った作者の原風景といえるべきものでしょう。真摯な画面を前にすると、目指すものは宋元の山水画であり、また岸田劉生のいう「在ることの不思議さ」をとらえることであろうかと思ひいたります。

写実から心象を経、さらに写実へと深化してきた三浦氏の世界をご堪能ください。

三浦 泉 略歴

一九五八年白山市(旧鳥越村)生まれ。八三年金沢美術工芸大学大学院(油絵)修了。九〇年光風会会員推挙。九五年第三十八回安井賞展佳作賞。九七年日展特選。現在無所属。個展を主体に活動。



遠い日 1995年 三浦 泉

第7展示室

第33回 伝統九谷焼工芸展

3月12日(金)～24日(水) 会期中無休
午後5時で閉室

◇連絡先

能美市寺井町よ二五番地
石川県九谷会館
TEL 〇七六一一五七一一〇二二五

◇入場料

一般 三五〇円(二八〇円)
大学生二八〇円(二二〇円)
高校生以下は無料

※(一)内は二十名以上の団体料金
当館友の会員は、会員証の提示
により団体料金になります。

昭和五十一年に郷土が誇る九谷焼の技術保存と発展向上を図るため、九谷焼技術保存会が石川県無形文化財として指定されましたが、本展はその技術保存会の事業の一つとして毎年行われている公募展で、今回は三十三回目となります。入選作並びに九谷焼技術保存会会員の作品を一堂のもとに展示します。

第7～9展示室

第16回 北陸国画グループ展

3月3日(水)～3月7日(日) 会期中無休
午後5時で閉室

北陸国画グループ展は北陸在住及び、ゆかりのある国画会出品者等で構成されています。国画会(国画展)は、毎年春に本展を新国立美術館で開催し、本年度で八十四回を迎える歴史のある公募団体です。

今回は春の本展に初出品予定のフレッシュな顔ぶれも多数参加します。写真部では併せて第八十三回国展でオープンスペース展示した作品を広坂別館にて展示します。絵画部三十名、写真部三十名が力作、大作を発表するとともに、藤田由理、横江昌人がフリースペース展示としてまとまった作品を発表しますので合わせてご覧くださいますようお願い申し上げます。

◇入場無料

◇後援

北國新聞社 北陸放送

◇連絡先

河北郡津幡町七野一〇七一一
本田正史
TEL 〇七六一二八八一八一九

小松美術作家協会が本年創立五十周年を迎えるにあたり、記念誌を発行し金沢展を開催します。本協会は日本画、洋画、彫刻、工芸、書、写真の六部門からなり、現在百二十余名の会員を擁しています。

いわゆる人間国宝の吉田美統氏(陶芸・釉裏金彩・重要無形文化財技術保持者)から二十代の若手まで、全国レベルで活躍する各部門の小松市の作家が最近五年以内の代表作を並べます。御静鑑を賜りますようご案内申し上げます。

◇入場無料

◇連絡先

小松市園町ホ九十一の一
北國新聞社小松支社内
小松美術作家協会事務局
TEL 〇七六一二四一三一一

玄土社の一年間の活動を集約する'09玄土社書展のご案内です。「今」を表現する抽象作品五十点と古典臨摹作品二十三点を展示いたします。

揺れ動き進化していく抽象表現の愉しさ。一方、不動のものとして存在する古典も、臨摹を通し視点をかえてみることで新発見がある面白さ。どちらも私たちに欠くことのできないワークです。

新しい書表現と古典を考えていただける好機会です。ご来場をお待ちしています。

◇会期中の行事「表立雲トクタイム」

日時・会場 三月二十一日(日) 午後一時三〇分
テーマ 「蘭亭序の誤解の解明」
初心者にわかりやすいお話です。

◇入場無料

◇連絡先

金沢市本多町一七一一五
玄土社主催 表立雲
理事長 松村知春
TEL 〇七六一二六三一一二二二

第8・9展示室

'09玄土社展

〈併催 蘭亭序 各種本DNA的・分類〉

3月19日(金)～3月21日(日) 会期中無休
午後5時で閉室

第8・9展示室

創立50周年記念 小松美術作家協会 金沢展

3月10日(水)～3月16日(火) 会期中無休
午後6時で閉室

遠き道展 - 伝えたい日本画の今 -

会期：1月4日(月)～2月7日(日)



人気作家岡村桂三郎氏のトークには若い人たちが集まりました



地元の中町力氏にはお世話になりました



掉尾は芸術院会員土屋禮一氏による日本画論



多くの出品作家がお手伝いにつけました
(中央：伴戸令子氏、右：高橋天山氏)

一月四日から二月七日の会期で開催された本展は、冬の開催にもかかわらず、会期中多くの方が訪れ、また二回、三回と足を運んでいただいた方が多く見受けられました。厚く御礼申し上げます。

本展は「現代日本画の潮流」と「視覚障がい者のための平面鑑賞」を紹介する二本柱で構成されていきました。この二本の柱にそって本展を振り返りたいと思います。

「現代日本画の潮流を紹介」
三十八名の作家の作品六十七点をもって現代日本画の潮流を紹介しました。日本画の伝統を踏襲し、現代的な息吹を吹き込んだ作品。更に、これまでの伝統を乗り越えた方法で制作された作品。現代日本画のアートシーンを全て網羅したとは言いませんが、現代日本画の現状と魅力を十分に味わっていただくことができたのではないのでしょうか。

なかでも毎週行われた出品作家によるギャラリートークは、生の作家の言葉で作品を鑑賞するという、またとない機会になりました。ギャラリートークに訪れた作家は、芸術院会員二名を含

む総勢十三名。内容は作品のテーマから、制作された背景、絵画論、芸術論におよび、大変興味深い内容ばかりでした。

「視覚障がい者のための平面鑑賞」
視覚障がい者の方に平面作品を鑑賞していただく。考えただけでも大変困難な試みです。しかし、その困難に挑んだのが「遠き道展」といえるでしょう。会期中には多くの視覚障がい者の方が訪れ、平面作品の鑑賞を楽しんでいただきました。

中でも、一月二十四日、二十五日の両日に行われたワークショップには県立盲学校の生徒さんをはじめ、多くの視覚障がい者の方、ボランティアの方に参加いただきました。特にボランティアの方の参加はのべ百名近くにのぼり、皆さんの関心の高さとその志に感銘を受けました。参加者とボランティアの双方の笑顔は充足感に満ちていました。また、参加の皆様からは美術館におけるバリアフリーや、ボランティアのあり方についても、種々貴重なご意見を頂きました。

最後に本展開催に当たり、御協力頂いた県内の各関係機関、さらに報道機関の皆様にも、あらためて感謝申し上げます。



盲導犬も一緒に鑑賞



県立盲学校の生徒とボランティアの皆さん

平成21年度開催の 展覧会を振り返って

今年度の当館は、リニューアルオープン二年目、開設五十周年記念の年として、通常の運営に戻り数々の展覧会が開催されました。それらの中からいくつかの展覧会を振り返ってみたいと思います。

「近代日本美術の精華―東京藝大コレクションを中心に―」は、石川県が明治時代になってからもいろいろな施策を行い、美術工芸の盛んな地域として評価され、現在まで継承されてきている大きな要因の一つに挙げられる金沢工業学校（現・石川県立工業高校）卒業生の東京美術学校（現・東京藝術大学）への進学、卒業後の石川県への影響・貢献を一つの視点としてとらえ、本県出身の美術学校卒業生の作品に加えて、明治四十年から開催された『東京美術学校石川県郷友会展』へ出品された近代日本の著名な作家達の作品を展示したものでした。高橋由一作《鮭》をはじめとする重文三點に、国宝《絵因果経》を特別出品いただき、藝大コレクションの優品を鑑賞いただきました。



高橋由一「鮭」を前に
〈近代日本美術の精華〉



国宝「納涼図」に見入る
〈久隅守景展〉

した。また、東京美術学校卒業生が石川県の美術工芸振興に果たした貢献の大きさも理解いただけたものと思います。

「久隅守景展―加賀で開花した江戸の画家―」は、狩野探幽門下の傑出した画家だった久隅守景の特別展でした。この展覧会は、加賀藩ゆかりの画家として、長年開催を企画していた展覧会でした。この度、東京国立博物館のご厚意により四十四年ぶりに国宝《納涼図》の出品許可が得られ、開催にこぎつけたものでした。重文《加茂競馬、宇治茶摘図》《四季耕作図》に当館の《四季耕作図》を加えた、守景作品の国指定文化財すべてが展示されるという初の大回顧展でした。守景といえば、四季折々の人々の営みを農作業を中心に、季節の風物を変えながら描いた四季耕作図の画家、田園画家といわれますが、中国風俗のもの、日本風俗のもの合わせて八点を展示いたしました。狩野派時代から独自の表現を完成させた晩年の作品まで、守景の全面業を鑑



芸術院会員によるギャラリートーク
〈遠き道展〉

賞いただけたものと思います。

「遠き道展―伝えたい日本画の今―」は、日展、院展、創画会などの公募展団体の垣根を取り払い、無所属（個展で作品発表）の作家を加えた現代日本画の有力作家の作品を鑑賞してもらう展覧会でした。これは、同展実行委員長で収集家のM氏の収集意図により可能となった内容でした。M氏の積極的なご参加で、十三名の出品作家により毎週日曜日に行いましたギャラリートークは大変好評をいただきました。また、視覚にハンディキャップのある方たちへの、蜜蝋ペンワークショップや鑑賞ガイドツアーも、多くのボランティアや鑑賞ガイドツアー実施することができました。今後の当館の事業に参考となる事業でした。

尊經閣文庫分館におきまして、「国宝北山抄―平安時代の儀式書―」を開催しました。同展をはじめとする展覧会に合わせまして、加賀百万石の文化講座を開催し、好評をいただきました。



笑顔満開のワークショップ
〈遠き道展〉

加賀百万石の文化講座

7日(日)	工芸王国のひみつをたんけん!		
14日(日)	演題「師と私の道」	三浦 泉氏(洋画家)	
27日(土)	「現代の絵画Ⅱ」	二木 伸一郎 学芸第一課担当課長	
20日(土)	「頂相について」	北澤 寛 学芸専門員	
13日(土)	「石川県立美術館 展覧会記録でたどる50年の歴史」	谷口 出 普及課長	
6日(土)	「石川県の金工作家たち」	南 俊英 学芸第一課長	
講演会	十三時三〇分	石川県立美術館ホール	聴講無料
キッズ☆プログラム	十三時三〇分	石川県立美術館第5展示室	参加無料

今年度初めて開催した「百万石の文化講座」は、好評のうちに四回の講演会を終えました。前田育徳会には加賀藩前田家が育成・収集してきた優れた文化財が今も数多く伝えられています。これらの所蔵品は尊經閣文庫の名でも知られ、研究者の利用に供するほか、当館二階の「前田育徳会展示室」で一般に公開され、毎月テーマに沿って作品を入れ替え、特別陳列として国宝・重要文化財なども数多く展示してきました。

一昨年のリニューアルオープンにあたり、展示室の名称を「前田育徳会・尊經閣文庫分館」と改め、育徳会と尊經閣文庫をより広く、また多くの方々に紹介することとしました。その一環として始められた今回の文化講座は、前田家当主前田利祐氏による幕末に活躍した加賀藩主の話に始まり、その後展示品に関連した講座を三回実施しましたが、いずれもホールに溢れんばかりの聴衆が集まり、熱心にその講義に聴き入っていました。

アンケートによれば、四回とも参加された方が全体の三割近くに達し、二度以上の方が約七割もおいでました。今後の進め方についてうかがうと、専門的な話や藩士や藩内の人たちの生活ぶりを知りたいとの声が聞かれました。

これらの声を参考にしながら、今年度も引き続き「百万石の文化講座」を開催していきたいと思っております。多くの方々のご来場をお待ちいたしております。

ミュージアムレポート

一月二十二日、「どこでもミュージアム」は、金沢市立小立野小学校にうかがいました。作品一点を選んでの学芸員との対話型鑑賞では、たくさんの児童が自分の意見を発表してくれました。また、その内容も友だちの意見を受けて自分の考えを発言してくれるなど、皆で一つの作品を「みる」ことでその作品を存分に鑑賞することができました。授業後の振り返りカードにも「県立美術館に行ってみよう」と書いてくれた児童がたくさんいたそうです。この「どこでもミュージアム」がきっかけでご来館につながると嬉しいですね。お待ちしております。

一月二十四日、第二展示室の「茶道美術名品選」の展示を鑑賞してもらったためのキッズプログラム「きじっ子茶会」が行われました。今回の掛軸は、当館所蔵の上村松園の「女房観梅図」。そして梅にちなんだお菓子。茶花もふきのとうが入るなど春を待つ雰囲気いっぱいのお茶会を楽しんでいただきました。茶会後は展示室に移動し、参加者の皆さんは、茶道具を熱心に鑑賞しているかお手前をじっくり見ていただく時間を取ったことで、展示室での鑑賞を身近に感じていただけたのではと担当者一同喜んでおります。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。



どこでもミュージアム 小立野小学校



きじっ子茶会



額装されていますが元は六曲一双屏風の左隻だったのでしよう。長い間老舗の温泉旅館に飾られ、訪れた客を迎えていた作品です。

横長のかなり大きな画面に、貧しい百姓家の風景が描かれています。やや細部への拘りが強い感じもありますが、その筆致は実に端正です。また画面左の細密な描写に比して、右隻へ続く間の取り方は大胆で、作品に大きな空気感を与えています。晩秋の朝の冷たく澄んだ外気や、そこに生きる人たちの生活感までも表現している作品といえます。その表現は、西洋的な空気遠近法をもって、日本画壇に近代化をもたらした師・竹内栖鳳の表現を受け継いでいるようです。しかし、栖鳳の光と影を割り切って描く洒脱さとはひと味違い、作者の繊細で実直な制作に対する姿勢を偲ばせてもいます。

明治十年、加賀市に生まれた作者は、石川県工業学校図案絵画科を卒業しますが、ここで久保田米憐に学んだようです。さらに東京美術学校に学んだ後、京都にて竹内栖鳳に師事。三十八年郷里に戻ります。その後は画業と家業の旅館経営の両方に励みました。この他に、あまり作例が見あたらぬのが残念な画家です。

二十一年度

友の会入会受け付け開始します。

3月1日(月)より受け付け開始
郵便でのお申し込みは郵便振替で

◎募集定員／1,500名

◎会費／2,000円

◎受付場所／情報・図書コーナー

◎受付期間／3月1日より開始し、募集定員に達し次第締め切ります。

◎受付時間／休館日を除く午前9時30分～午後5時

※3月8日(月)・9日(火)、28日(日)は

31日(水)は展示替えによる休館日です。

※3月8日(月)・9日(火)、28日(日)は

◎郵便でのお申し込みについて

①ご希望の方は郵便振替をご利用下さい。

②詳細は『美術館だより』第316号をご覧下さい。

③会員証は『美術館だより』と一緒に、3月末頃からお送り致します。

④郵便振替口座／0070017146490

加入者名／石川県立美術館友の会

《会員の特典》

★当館コレクション展に何度でも無料で入場

★当館企画展入場券(1枚)の配布

★当館主催展覧会入場料の割引(同伴者2名まで)

★当館主催諸行事への参加

★『石川県立美術館だより』を毎月郵送

お問い合わせは当館普及課友の会係まで

TEL (076) 231-7580

